

組織横断型活動推進プロジェクト(+PIT)展開中!



▲参加者で賑わう「ガクサイ」の会場

その他のトピックス一覧

10 Oct.

- 第51回北海道科学大学祭「稻峰祭」を開催しました
- 「プロジェクトF」による北海道科学大学公開講座を開催しました
- 理学療法学科の田中敏明教授が駐日英国大使公邸で円卓会議に参加しました

11 Nov.

- 北海道科学大学「科学“大”実験ブース」を開催しました
- 北海道科学大学協学会創立50周年記念事業 特別講座「COLORS Project-01」が開催されました
- 医療法人仁穎会病院と教育・研究等に関する包括連携協定を締結しました

12 Dec.

- 薬物乱用防止局の学生が「第2回社会貢献事業薬物乱用防止キャンペーンin北海道」に参加しました
- 薬学部の学生が「第7回全国学生英語プレゼンテーションコンテスト」でトップ50賞を受賞しました

01 Jan.

- 札幌市消防出初式において本学が紹介されました
- メディアデザイン学科の学生が「平成31年手稲区成人式」で配布された式次第の表紙をデザインしました
- 工学部東棟(F棟)が完成しました

医療系国家試験合格発表日

薬剤師	2019年3月25日(月)	義肢装具士	2019年3月26日(火)
看護師	2019年3月22日(金)	臨床工学技士	2019年3月26日(火)
理学療法士	2019年3月25日(月)	診療放射線技師	2019年3月25日(月)



▲第51回稻峰祭を開催



▲科学“大”実験ブースを開催



▲仁穎会病院と包括連携協定締結



▲学生が手稲区成人式の式次第をデザイン

+Professional

ヒューマニティ、コミュニケーション能力、問題発見・課題解決能力、マネジメント能力といった基盤能力を基に、専門性を身につけた人材を育成します。
すべての設置校に共通する、わたしたちのスローガンです。

北海道科学大学
北海道科学大学高等学校
北海道自動車学校
北海道科学大学附属薬局

- 工学部
機械工学科 / 情報工学科 / 電気電子工学科
建築学科 / 都市環境学科
- 薬学部
薬学科
- 保健医療学部
看護学科 / 理学療法学科 / 義肢装具学科
臨床工学科 / 診療放射線学科
- 未来デザイン学部
メディアデザイン学科 / 人間社会学科
- 短期大学部
自動車工学科

特集 人のためにできること

つながりのその先へ。



Contents

- 01 特集「人のためにできること」
身近なつながり / 地域とのつながり / 未来とのつながり
- 07 HUS PEOPLE
- 09 HUS info
- 14 HUS キャンパスイルミネーション2018

できることに 人のために

| 特集 |



身边なつながり

北海道科学大学が有する13学科及び短期大学部では、学科単独で、又は学科連携で、数多くの取り組みを行っています。あなたがどのように社会に役立つかをご紹介する特集企画。

2017年の本学開学50周年を機にスタートした、HUSキャンパスイルミネーション。本学の客員教授であり、ステンドグラスアーティストとしても活躍するMie氏が制作したオブジェが構内を彩り、大学関係者はもとより毎冬、街ゆく人々の目を楽しませています。

本学ではこれまで、さまざまな事業を通して、地域に暮らす方々との交流に取り組んできました。

およそ30年前に学生たちの発案でスタートした大学周辺地域のゴミ拾いは、現在、周辺の町内会との合同実施へと成長し、続いている。冬期間の恒例行事と言えば「雪かき隊」。地域に暮らす高齢者独居世帯を対象に学生たちの若い力を生かして除雪を行っています。

ほかにも、手稲区30周年のロゴを本学学生がデザインしたり、かがくガオーの地域イベント参加など、バラエティ豊かな活動を通して、地域に愛される、開かれた大学づくりを実践しています。

学生たちが積極的に街に出向くことで、生まれるメリットとは何でしょうか?学生たちにとっては、社会の中で“実践”を積むことができます。一方、地域にとっては、学生たちの新鮮なアイディアや新しい視点を取り入れることができます。さらに、地域の人や課題を直接見聞きし、触れることが“地域への愛着”です。

街に行き、街を知り、街を考えることで“手稲”を好きになる。地域の発展を支える若者を育てることは、社会的急務のひとつですが、こうした地域活動も、地域を元気にする若い人材の育成につながっています。



手稲で活躍する学生たちをご紹介します! ♪

手稲区30周年ロゴを、本学の学生たちが発案。

手稲区は西区から分離して、2019年に30周年を迎えます。その30周年を記念するロゴマークを制作したいという依頼が区役所から大学にあり、有志約15名で、1年間という長い期間をかけてロゴの制作を進めました。

メンバーの中には手稲区民ではない人ももちろんいて、まずは「手稲区を知ろう」と、さまざまな場所に赴きフィールドワークを行いました。そのほかにも区民の方に手稲区の好きなところをヒアリングしたり、手稲高校の皆さんにアンケート調査を行ったり…そうして生まれたのが、手稲の四季や名所がひとつにつながって結ばれた、このロゴマークです。「これからも、人と街と自然が調和した区であって欲しい」そんな願いを込めて作りました。たくさん的人に活用いただきたいです。



▲完成したロゴマーク。2019年4月から翌年3月まで、希望者は無料で使用が可能。



デザインを手がけた
たんぽ
せしる
反保聖志留さん
メディアデザイン学科3年

総勢150名! 雪かき隊、今年も元気に活動中です!!



冬期間のボランティア団体「雪かき隊」は、大学周辺に住む一人暮らしの高齢者住宅を対象に除雪を行う団体です。僕は旭川出身で、雪の多さは身に染みていましたから、困っている方の手助けができると入隊しました。雪かき隊では、除雪を希望する方から連絡をいただき、実際に現地に行って除雪の範囲やスケジュールを確認した上で実行しています。今年は1月中旬までに、すでに16件の申し込みがありました。除雪に行くと僕が思う以上に喜んでくれて、やりがいを感じますね。メンバーは、都市環境学科の1~3年生は全員参加なので150名弱と大所帯。僕らの学科がメインではありませんが、今年は活動する範囲を広げたこともありメンバーは随時募集中。他の学科の仲間たちも増やしていきたいです。



雪かき隊・隊長の
やまとりく
山本陸さん
都市環境学科3年

ボランティアを通し、 地域や幅広い世代との 交流を。



ボランティア局・局長の
せお たつき
瀬尾樹生さん
診療放射線学科2年

大学周辺のゴミ拾いは、昭和63年にスタートした大学の中でも歴史ある取り組みのひとつで、2017年春に30回目を迎えました。現在は各部活動のメンバーが参加しており、昨年は教職員含めて700名の人たちと、周辺町内会の皆さんと一緒にゴミ拾いを実施しました。大学生活を送る中で自宅と学校の往復だけでは、同じ世代の人との関わりしか生まれず、地域との交流が希薄になります。社会に出るとさまざまな世代とのつながりが当然必要になるので、地域の人と関わることで経験の幅を広げていきたいです。今後ボランティア局では、町のお祭りやスポーツ大会への参加などを通じて、区民の皆さんとの距離を縮める活動をしていきたいと考えています。

認知度が年々アップ! 地域のイベントにも 伺います!



かがくガオー
プロジェクト・
リーダーの
すずき あやか
鈴木彩香さん
看護学科3年

大学のPRや地域貢献のため、大学のマスコットキャラクター「かがくガオー」のプロモーションを考えたり、実施するのが、かがくガオープロジェクトです。発足当時に比べ、徐々に認知度が向上てきて、現在は周辺小学校でのあいさつ活動や、地域のお祭りなどにも参加させていただいている。これまで小学生やその保護者の方、また地域の高齢者の方とのふれあいが多かったのですが、今後は中学生や高校生とも関わることで、より大学に身近な層にアプローチをしたいと思っています。「イベントに来て欲しい!」という方は是非、大学までご連絡ください。地域を盛り上げるために活動を行っていきましょう!

かがくガオープロジェクトの活動については、P7~8の「HUS PEOPLE」でも紹介

地域とのつながり

200万人にも届く勢いで人口が増加し続けている札幌は、巨大都市でありながら、1年の1/3が雪に覆われているという、世界でも稀な地域であることをご存知でしょうか。

本学は開学以来一貫して、北海道における「積雪寒冷技術」の教育研究に取り組んできました。

北海道は明治期以降、新しい地域社会を築き上げ、冬期間の生活環境は以前と比べて大きく向上しましたが、まだまだ大雪に対する「雪対策」や、寒冷に対する「エネルギー消費量の増大」や「冷害」など未解決の問題がたくさんあります。

現在本学では4つの研究所が、北国暮らしを快適にするために、地域に根ざした、さまざまなプロジェクトを進行しています。

また、研究所以外でも本学には、人々の暮らしを良くするために、解決しなければならない課題に挑戦し続けている先生たちがいます。

短期大学部には、雪道でも滑らない技術の開発に向き合っている先生がいます。薬学部には、認知症の原因究明に取り組んでいる先生がいます。ゴールはまだ先かもしれませんのが、これらの取り組みが人々をより良い暮らしに導いてくれると期待できる2つの研究をご紹介します。

北海道の暮らしを考える、本学4つの研究所。

IF Institute of Research Life Style and Environment for Future
寒地未来生活環境研究所

積雪寒冷地における、
持続可能な住環境の構築に資する技術の
開発及び人々の生活環境を支援・向上

本研究所は、寒冷地生活環境に潜在するさまざまな問題を解決するため、人、医療、機械、情報、電気、建築及び土木分野における技術のシナジー効果を最大限に發揮し、新たな学際的・分野融合的領域の創出を目指す研究・開発を推進しています。

RINC Research Institute of Northern Regional Community
北方地域社会研究所

人文社会科学と工学との連携を軸とする分野横断型の研究地点を形成し、自治体、企業、NPO法人などの各種団体との交流・連携を通して、地域の課題解決に向けた研究活動を推進

本研究所は、北海道を中心とした地域社会が抱える諸問題を研究課題とする人文社会科学と工学との連携を軸に据えた分野横断型研究グループを形成し、各地域の自治体、企業、NPO法人等各種団体と協働して、地域社会の課題解決及び地方創生へ向けた研究活動を行います。



PICK UP!

北海道科学大学では、北国の豊かな生活環境を創出するため、3つの研究に取り組んでおり、この取り組みが、平成29年度 文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」に選定されました。
詳しくは本学HPをご覧ください ▶ <https://www.hus.ac.jp/brand/>

本学で取り組む研究をまとめた「研究シーズ集」。
ご興味のある方は、本学HP(https://www.hus.ac.jp/cooperation/ind_det/)をご覧ください。



ブラックアイスバーンに思わず、ヒヤリ。

そんな危険がなくなる、
まさに“転ばぬ先の杖”のような研究。

凍結路面の滑りやすさを検知することに関する研究
短期大学部 自動車工学科 助教 岩間 大舗 先生

今、さまざまなメーカーで自動運転の技術開発が進められていますが、冬期間の北海道のような「ブレーキをかけても止まらない状況」があることまではなかなか想定されていないのが現状です。あらかじめ路面の滑りやすさがわかれれば、早めにブレーキをかけるなどの対策ができます。私たちが生活の中で培ってきた「経験値」を目で見える「数値」で判別するための研究に取り組んでいます。

実は現行の車にも路面で滑った際に、ブレーキを制御する「ABS(アンチロックブレーキシステム)」が装備されていますが、それはブレーキをかけてからの制御をコントロールする装置。今、開発したいと考えているのはブレーキを踏まなくても、その先の道の滑りやすさがわかる装置です。

現在は、まず車の真下がどういう状況であるのかを調べるためにデータを探っています。これが製品化となるともう少し先の話になりますが、同じ短期大学部の城戸教授は、運転を支援するために車載されている既存のカメラ画像から、路面の滑りやすさが測定できないかどうかの研究を進めており、これが完成すればすぐにでも実用化が可能です。

私が取り組む「滑りやすさがわかる装置」ができれば、渋滞予測と同じように、路面の滑りやすさを予測して多くの人に伝えることができるでしょう。逆に小型化を進めれば車椅子に搭載することができますし、もっとコンパクトになれば眼鏡にも取り付けることができます。雪道を歩いている高齢者が転んで骨折するような事故がなくなるかも知れない、そういう視野の広さがこの研究にはあります。インフラなら都市環境学科の先生、車椅子なら保健医療学部の先生と学内に研究を発展させるつながりもあります。未来に思いを馳せつつ、まずは目前の研究を進めていきたいですね。



▲ 岩間先生は、さまざまな波形がある光を「縦に振動する波」と「横に振動する波」に分け、その2つが跳ね返る時の光の量を比較することで表面の荒さを調べているそう。表面が荒ければ荒いほど滑りにくいと言えます。

5人に1人が認知症になる時代、“人ごと”ではありません。

薬学部には、この身近で深刻な問題に取り組む先生がいます。

レビー小体型認知症の早期発見・早期治療を目指す研究 薬学部 薬学科 助教 山 佳織 先生



▲ 認知症に直面して困った時には、遅いのかもしれません。まずは「認知症を知ること」が、認知症ではない人たちの努力なのかも。手稲区で認知症を学ぶ勉強会などができると理解が深まりそうです。

2025年には65歳以上の認知症患者数が約700万人、5人に1人になると見込まれています。…にも関わらず、認知症には特効薬がありません。物忘ればかりではなく、幻覚、妄想、徘徊などの随伴症状が出ると、家族や周りの方の負担は計り知れず、対策は急を要します。

認知症は、アルツハイマー型とレビー小体型、脳血管型と大きく3つの分類に分かれており、アルツハイマー型は患者数も多く研究も進んでいますが、レビー小体型は比較的最近発見されたこともあり、不明な部分が多いことから、その解明のための研究をスタートしました。目的は大きく3つあって、どれだけの薬を飲むと、どれだけ効くのかといった、薬の効果を最大限に得るために指標を作ることがひとつ、そして患者さんによって副作用の現れやすさにはどのような違いがあるのか、これらにより適切な薬物治療の実現を目指します。もうひとつが、そもそもなぜレビー小体型の認知症が起こるのかという病因の解明です。

これらを明らかにするためには、患者さんのデータを分析することが不可欠なのですが、とにかくレビー小体型の患者さんが少ないです。今回の研究は、薬学部の三浦教授と共同で進めていますが、三浦教授は精神科の医師としての顔もお持ちで、現在も病院に勤務しています。共同研究先の精神科の病院と連携し、患者さんに許可をいただいた上で、検査で余ったレビー小体型の血液サンプルを分けてもらい、今はそれを検体として集めています。研究を進めるには、認知症の症状のない方、アルツハイマー型の方などさまざまな患者さんのデータが必要です。そのためにも、まずは皆さんの身近にある大学で研究していることを知ってもらうこと、そして、関わっていただける方がいるなら本当にありがとうございます。まだ始まったばかりの研究ですが、早期発見・早期治療を目指した、適切な治療を提供するための一歩にしたい、そして認知症で困っている患者さんやそのご家族に役立てられたら、そう思います。



未来とのつながり

「北海道」と命名されて150年と開けた2018年。その記念すべき年に、北海道を未曾有の災害が襲いました。9月6日3時7分、北海道胆振東部地震です。地震によって引き起こされた北海道全域のブラックアウト。この大規模停電は、本学が立地する手稲区にも深刻な影響を与えました。



▶インターネットやテレビが使えない際に大活躍したポータブルラジオ



▲本学R3棟に設置している、ガスコージェネレーション本体
災害時に停電が起きた場合でも、都市ガスを燃料として電気と熱をつくる

情報を収集するにも、家族の安否を確認するにも、とにかく必要だったのが電源。本学中央棟(E棟)は、電気と熱を同時に発生させる発電供給システム(ガスコージェネレーションシステム)を導入していたため、電気の使用が可能だったことから、地震発生当日の6日より施設を一般開放。スマートフォンなどの充電を求め、大勢の近隣住民の方が詰めかけました。さらに、情報不足を解消するため大型スクリーンにテレビ放送を投影。

食料や飲み物の物流がストップしたことから備蓄していた非常食を提供し、札幌市の基幹避難所の指定を受けている体育館は、寝泊まり可能な避難所として開放しました。

私たちは常に新しい明日へと歩みを進めています。予測できない困難に直面した時、果たして何ができるのか…?今回の震災は、図らずも大学のあり方を考える契機となりました。

課題の解決も大切ですが、課題を“見つけること”も重要です。そして北海道に暮らす私たちだからこそ気付くことがあります。課題の発見と解決、その情報の蓄積が、まだ見ぬ未来への“備え”になります。

北海道の未来のために私たちは研究に向き合い続けます。いつも「人のためにできること」は何かを考えながら。

北海道胆振東部地震を振り返って

震災時の大学の対応

札幌市の基幹避難所に指定されている本学体育館では、9月6日~9日までの4日間、札幌市職員と本学職員が中心となり、ブルーシート、寝袋、ランタン、簡易トイレなどの避難所用品を用意して避難所を開設しました。

北海道全域で発生したブラックアウトでは、本学も同様に停電となりましたが、2017年に竣工した中央棟(E棟)にはガスコージェネレーションシステム(CGS)を導入していたため、ガスでの発電が可能であったことから、学生及び一般の方に対して携帯電話の充電サービスや、避難・休憩スペースとして施設を開放しました。その他、大学で備蓄してあった非常食の配付(2日間で約300食)や学生食堂からの炊き出しなども実施しました。



▲震災後、避難所開設準備中の体育館
数年前に避難所の開設訓練を実施しており、その時の訓練に参加していた職員が多くいたのが、スピーディな避難所開設につながりました

札幌市手稲消防署 消防司令長 五十嵐努さんにお話を伺いました



昨年9月6日、北海道胆振東部地震が発生した際に、我々が真っ先に行ったのが災害対応です。手稲区は幸いにも被害は少ない方でしたが、当時は80件近くの通報があり、災害対応を優先的に行っていたため、大学に400名近くの方々が避難されていたことは後から知りました。

今回の震災では特に、携帯電話の電池切れに困った方が大勢いらっしゃったと思いますが、その中で、大学が実施した24時間の充電サービスや、区役所の指示のもとに開設された避難所もスピード感のある対応だったのではないかと思います。そういう大学の対応は、地域の方にとって心強さや安心感につながったと思います。

防災面でのつながり、また安心安全なまちづくりという点で、大学と地域の連携は、これまで以上に期待したいですね。大学と地域の方々に顔の見える関係が生まれると、大きな災害にあった時にもお互いに助け合う「共助」の部分で協力しあえると思います。知らない者同士が助け合えるかというと、なかなか難しい面もあります。顔の見える関係が、共に助け合える関係に育っていく。住民の方が大学が地域にあって良かった、ここに住んでいて良かったと思う、そんなつながりをこれからも築いていって欲しいと思います。

手稲消防署と
本学の
取り組み事例



▲本学が札幌市の総合防災訓練の会場に



▲山岳部の部員が手稲消防団の訓練大会に参加



▲本学学生がデザインした
「防火ステッカー」

「突然の災害が起きた時、自力で避難できない人たちを、どうサポートする…?」
そんな問題に産官学で取り組む
宮坂先生の研究が、この春いよいよ製品化。

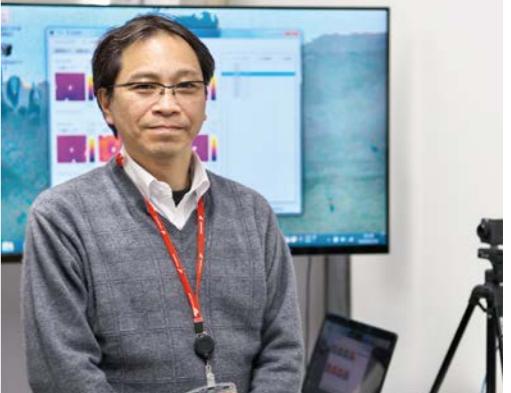
高齢者が入所されている施設で火災などの災害があった場合、一人で逃げることができないという前提があります。しかも夜は施設の職員さんが手薄になるという実情もあり、夜間火災の場合は、現状では効率的に逃げる方法がありません。そういった状況を打破するために取り組んだのが、車椅子に人を乗せたまま、介助者が一人で階段を下ることができる避難器具の開発でした。今回の避難器具は、避難器具の製作会社と札幌市と、本学の産官学で取り組んできたものです。

開発中、2017年には手稲区の特別養護老人ホームとグループホームで試しに使っていただき、現場の要望を取り入れてきました。昨年は「もし、演奏中に災害が起きたら…?」という想定で、札幌文化劇場hitaruでの避難訓練コンサートに参加しました。hitaruはさっぽろ創世スクエアの3階から9階に位置する施設で場内も階段形式で、非常に避難する際は階段移動になります。避難訓練では、通常数人がかりで避難させる車椅子利用者を、介助者一人で階下へ下るデモンストレーションを行い、多くの方にそのメリットを実感いただきました。商品の開発から製品化まで、研究開発としてはひとつのゴールを迎えましたが、今後は製品の改良と、社会に普及していくような取り組みを続けていきたいと思います。

人を乗せて階段を降りる避難器具は、ヨーロッパやアメリカでは法律で設置することが義務づけられていますが、日本には設置の義務がなく自主的な導入のみ。だから普及が進みません。大規模な火災が起きた時に逃げられない人は、同じフロアで火元から遠いところに退避し、救助が来るまで待つという逃げ方なんです。そういった逃げ方に加えて、新しい避難器具があれば避難の選択肢は広がりますよね。自力で逃げられない人たちが、より安全に、早く、確実に避難できる方法を、増やしていきたいというのが私の思いです。



▲2019年春から新発売になる避難器具「チェアキャリダン」



▲理学療法学科の宮坂智哉教授

HUS PEOPLE

大学に関わるさまざまな「ヒト」をクローズアップするHUS PEOPLE。今回ご登場いただくのは、かがくガオープロジェクトのメンバーたち。紙面をご覧になっている皆さんのなかにも、「かがくガオーを見たことがある」という方がいらっしゃるのではないでしょうか…?かがくガオーと一緒に、大学の認知度アップのため、さまざまな活動を行うプロジェクトメンバーの面々にお集まりいただきました!

かがくガオープロジェクトとは?

大学のマスコットキャラクター「かがくガオー」と一緒に、大学のPRや地域貢献のために、さまざまなプロモーションを企画・立案・実施するのが、かがくガオープロジェクトの皆さんです。発足当時は10名だったメンバーも、かがくガオーの認知度の向上と共に増え、現在は学生25名プラス教職員で運営しています。



第1回
Q かがくガオーはネコである
○? X?

かがくガオープロジェクト・リーダーの 鈴木彩香さん(看護学科3年)に聞きました!



KAGAKU-GAO

私たち「かがくガオープロジェクト」は、かがくガオーと共に大学のPRや地域貢献のために、さまざまなプロモーションを企画、実行する団体です。学部や学年の中を越えて、現在、25名のメンバーが所属しています。オープンキャンパスや大学祭など、学内のイベントはもちろん、周辺小学校でのいざつ運動をしたり、地域のお祭りに参加したり、昨年は町内会の方にお声がけいただいて、新たなイベントに参加することができました。

地域に出向くと、やっぱり小さい子の反応が良いですね。かがくガオー目掛けて駆け寄ってきてくれたり、手をふってくれたり。私自身子どもが好きで、かがくガオープロジェクトに参加したので、子どもたちと触れ合ったり、親しく接することができてとても楽しいです。子どもたちを通して保護者の方にも大学のことを知っていただくことができるので、認知度アップに貢献できていると感じています。

大学周辺の認知度は上がりつつあります。手稲区は広いので、大学周辺以外のエリアにも活動の幅を広げていきたいです。手稲区には、マスコットキャラクターの「ていぬくん」がいて「ていね夏あかり」というイベントなどでも一緒にさせていただきましたが、ていぬくんとのコラボでもっと地域を盛り上げていきたいです。

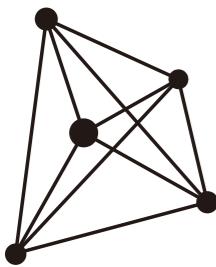
プロジェクトのメンバーとは最近の課題として、かがくガオーのTwitterのフォロワー数を増やしたいと話しています。目標は、フォロワー1,000人超え! 皆さんの応援、お待ちしています。



かがくガオーの公式Twitterは @kagaku_gao でチェック!!



科学“大”実験ブースにて



HUS info

北海道科学大学の各学科から最新ニュースをピックアップ。
最新の研究レポートや、教員・学生たちの活躍など幅広い話題をご紹介。

道南地域でフィールドワーク実習を行いました。



REPORT / 未来デザイン学部 人間社会学科

FACULTY OF FUTURE DESIGN / DEPARTMENT OF HUMANITY & SOCIAL SCIENCE

2018年12月6日(木)~8日(土)、人間社会学科社会学専攻の「フィールドワークII」の授業で、3年生6名と引率教員2名(濱谷雅弘教授、梶谷崇教授)の8名で道南地域を訪問し、インタビュー活動を行いました。

人間社会学科では昨年度より第三セクター鉄道である道南いさりび鉄道の活動に注目して学んでいます。道南いさりび鉄道は、2016年3月の北海道新幹線開業と一緒に並行在来線の旧江差線を引き継ぐ形で誕生しました。同社は、道南地域密着型の独自の取り組みを展開して、その取り組みは全国的にも注目されています。

今回のフィールドワークの目的は、鉄道を盛り上げるために頑張っている方々にインタビューを行い、どのような思いを持ち、どのような将来像を描きながら活動をしているのか、夢や課題を聞き取ることです。同社の企画営業課長の勝又康郎さんへのインタビューを始め、木古内町や北斗市を訪問して、地域応援団リーダーの方々に直接お話を伺いました。鉄道会社と地域住民との距離がとても近く、対等な関係で互いに協力しあって小さなこと、できることから少しずつでもやっていこうという雰囲気が感じられました。今後は沿線にサクラを植樹するなどといった、いくつかのアイディアがすでにあるということです。

学生たちは、「インターネットで事前に調査を行っていたが、直接お話を伺うとさらに深く関係者の思いや考えを知ることができた」という意見も聞かれました。また学生からも、盛り上げ策のアイディアを出すなどの意見交換もあり、会話も盛り上りました。今後、参加学生はインタビュー内容を文章化して報告書にまとめます。報告書は今回インタビューに応じてくださった方々へもお渡しする予定です。

paseo creators camp 映像コンテストで「準グランプリ」を受賞！

AWARD / 未来デザイン学部 メディアデザイン学科

FACULTY OF FUTURE DESIGN / DEPARTMENT OF MEDIA ARTS & DESIGN

2018年11月24日(土)・25日(日)に、JRタワーpaseo主催の映像コンテストが行われ、メディアデザイン学科の学生チーム「HUS MD1」の作品が準グランプリを獲得しました。このコンテストは、若手クリエイターを応援する取り組み「paseo creators camp」の一環として開催され、札幌市内の教育機関ごとにエントリーを行います。本学科からは3チームがエントリーし、今回の応募条件であるパセオをPRする1分のショートフィルム作品を制作しました。

今回準グランプリを獲得したHUS MD1の作品は本学科の倉本浩平講師が担当する講義「コンピューターエンターテイメント」内の課題として制作されたもので、実写を2画面に構成し、ストーリーをテンポよく展開させながら、パセオが誰にとっても主役になれる場所であることを見ています。タイポグラフィーや音楽など全てがオリジナルで、とても印象的な作品です。

表彰式では、チームリーダーの伊藤雅樹さん(3年生)が、審査員でイベントのイメージキャラクターでもあるシンガーソングライターのRihwaさんより表彰状を受け取りました。



▲表彰状を受け取るチームリーダーの伊藤雅樹さん



▲準グランプリを受賞したショートフィルム

井野拓実助教が編者を務めた、 新しい理学療法の 専門書が創刊！

NEWS / 保健医療学部 理学療法学科

FACULTY OF HEALTH SCIENCES / DEPARTMENT OF PHYSICAL THERAPY



理学療法学科の井野拓実助教が編者を務めた「人工膝関節全置換術の理学療法」が2018年12月に出版されました。構想から執筆者の選定、内容の編集に2年という歳月をかけ、これまでにない新しい理学療法の専門書として発刊されました。特定の疾患に限った標題ではあるものの、内容は膝関節に限定されず、広く理学療法の分野に貢献するものとなっています。科学的な根拠に基づつつも、経験や感覚などを最大限に活用しながら実施する理学療法にあって、そのどちらも適度に網羅している“Art & Science”を体现した1冊です。過日開催された学会では、当日の売り上げNo.1という結果を打ち出しました！

臨床現場の今を聞く、 特別講演を開催。

REPORT / 保健医療学部 診療放射線学科

FACULTY OF HEALTH SCIENCES / DEPARTMENT OF RADIOTHERAPEUTIC TECHNOLOGY



2018年12月に本学講義室において、診療放射線学科の学生を対象とした特別講演を開催しました。今回はJA北海道厚生連遠軽厚生病院 診療放射線科副技師長で、北海道科学大学客員准教授でもある島崎洋先生にお越しいただき「放射線技師にとっての危機管理」と題して、本学科の学生を対象に講演をしていただきました。放射線技師業務の実際や注意点について、臨床例も提示しながらお話しいただき、聴講した学生は熱心に耳を傾けていました。臨床の現場の声を聞くことは今後の進路選択においても重要であり、これからも現場の技師の先生方にお越しいただきたいと考えております。

第32回北海道技術・ ビジネス交流会に出展。 大勢の方がMR技術を体験！

REPORT / 工学部 情報工学科

FACULTY OF ENGINEERING / DEPARTMENT OF INFORMATION & COMPUTER SCIENCE

2018年11月に開催された「第32回北海道技術・ビジネス交流会(ビジネスEXPO)」において、情報工学科の和田直史講師が「MRによる情報可視化がもたらすミライ」をテーマに展示を行いました。道内の大学で唯一、「先端技術ゾーン」で大学単独での展示となり、北海道副知事をはじめ大勢の方が訪れてMR技術を体験されました。※MR(Mixed Reality:複合現実)とは、現実空間にCGなどで作られた仮想物体を表示し、仮想世界と現実世界を融合させる技術です。



学生同士と教職員の親睦を深める、 交流イベントを開催。

REPORT / 短期大学部 自動車工学科

FACULTY OF JUNIOR COLLEGE / DEPARTMENT OF AUTOMOTIVE ENGINEERING

2018年11月27日(火)、2年生の学生同士と教職員との親睦を深めるクラス対抗イベントとして、バレーボール大会とドッジボール大会を開催しました。大会終了後はHITプラザ食堂にて表彰式を行い、優勝したクラスには賞品としてカップ麺204個(17箱)が贈呈されました。その後の懇親会では、お弁当を食べながらビンゴゲームを行い、大いに盛り上りました。参加した2年生の皆さんにとっては、今回のイベントを通してクラスの仲間意識を高め、教職員とも親睦を深める良い機会になったことでしょう。



今後も北海道科学大学短期大学部は学生と一緒に自動車業界を盛り上げていくので、応援以及び協力よろしくお願い致します。





薬学部の三浦淳教授が、第24回ヨーロッパ睡眠学会で発表しました。

REPORT / 薬学部
FACULTY OF PHARMACEUTICAL SCIENCES / DEPARTMENT OF PHARMACY

FACULTY OF PHARMACEUTICAL SCIENCES / DEPARTMENT OF PHARMACY

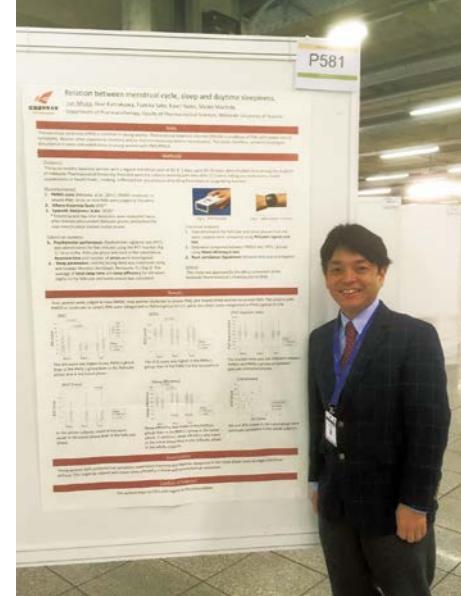
2018年9月25日(火)～28日(金)まで、スイスのバーゼル市で開催されました、第24回ヨーロッパ睡眠学会でポスター発表致しました。演題名は"Relation between menstrual cycle, sleep and daytime sleepiness"(月経周期と睡眠、日中の眠気との関連)です。本研究は薬学部の女子学生に被験者として協力していただき、遂行したもので、月経のある女性は、月経前に睡眠の質が悪くなり、日中の眠気が強くなります。さらに月経前症候群(PMS)という、月経前に心身の不調を感じる女性は、PMSがない女性に比べ、月経前の睡眠の質が悪く日中の眠気も強いことが明らかとなりました。これらの知見は、アンケート(主観的尺度)のみならず、睡眠中の活動量(客観的尺度)でも確認されました。のことから、女性、特にPMSのある女性は、月経前の睡眠を改善し、日中の眠気を解消する必要があると考えられました。

学会が開催されたバーゼルは、人口約18万人のスイス第3の都市です。バーゼルには、バーゼル大学の他、ノバルティスやロシュという世界的な製薬会社の本社があり、国際学会がしばしば開催されます。市街地の中央をライン川が流れおり、産業地帯(北岸)と、行政・商業中心(南岸)を分けています。著名な観光地はありませんが、路面電車やバスから街並みを眺めるだけでも楽しめました。学会後、バーゼル近郊のラインフェルデンという温泉地にも行ってきました。温泉施設では、湯船や温泉プールは水着着用で混浴ですが、サウナは水着もタオルも着け(!)混浴です。詳細は割愛させていただきます。その晩は熟睡でき、心身の疲れがすっかり取れました!スイスの食事と言えばチーズフォンデュが定番ですが、ラクレットも有名で、非常に美味しいかったです。

今回の学会参加で見聞したことは、今後の授業や研究、臨床に役立てたいと思います。今後も、臨床的に意義のある研究を推進し、その成果を広く国内外に発信していきたいと思っております。



△スイス料理ラクレット



▲ポスター発表会場にて



▲バーゼル市を流れるライン川



▲温泉町ラインフェルденのメインストリート

超難関試験、第1種ME技術実力検定試験に学生3名が見事合格!

RESULTS / 保健医療学部
臨床工学科

FACULTY OF HEALTH SCIENCES / DEPARTMENT OF CLINICAL ENGINEERING

臨床工学科では2年次に全員が「第2種ME技術実力検定試験(ME2種)」を受験します。この試験は、臨床工学技士の国家試験の合格を目指す4年生なら当然取得しないなければならないもので、医学的知識、理工学的知識、医療機器に関する知識などに加え、小論文も課されています。

この上には「第1種ME技術実力検定試験(ME1種)」があり、ME2種に合格している人、あるいは臨床工学技士免許を持っている人しか受験ができません。すでに医療機関で働いている臨床工学技士の方たちや医療機器の研究・開発・販売などを担当している人たちも多く挑戦しています。合格率は全国でわずか20~30%と、かなりの難関であることがわかります。

本学科でも受験者が少ないながらも毎年合格者を出しており、今年は4年生の末吉さん、山崎さん、高杉さんが合格しました。高杉さんは受験の動機について、「就職にも有利に働く材料を増やしたいと思った」と話してくれました。山崎さんは3年次の臨床実習のための準備の一環としてME1種の勉強を始め、分野ごとにノートを作成して勉強したそうです。末吉さんも「内容が深いので自分で問題の解説ができるレベルまで理解するように解いた」と語りました。合格が単なる偶然ではなく、3人の努力の賜物であることが話を聞いてよくわかります。本当にめでとうございます!



△左から、末吉さん、山崎さん、高杉さん

学生のアイディアを、北海道のチカラに! 初事業で学生がプレゼンテーション。

REPORT / 工学部
FACULTY OF ENGINEERING / DEPARTMENT OF MECHANICAL ENGINEERING

FACULTY OF ENGINEERING / DEPARTMENT OF MECHANICAL ENGINEERING



2018年12月6日(木)、第1回道内大学生による「ものづくり製品化＆起業化支援事業」で機械工学科の学生がプレゼンテーションを行いました。この事業は、札幌商工会議所が主催となり道内で学ぶ優秀な理系・技術系大学生の道内定着と、学生のビジネスアイディアによる北海道の活性化を目的としています。

機械工学科の竹澤研究室と北川研究室のそれぞれのゼミ学生で構成された2チームが企業55社を前にプレゼンテーションを行い、支援を検討する5~6社の企業から面談申し込みがありました。

正解のない質問にどう答える? 1年後期「プロジェクトスキル」を実施。

REPORT / 工学部
FACULTY OF ENGINEERING / DEPARTMENT OF ARCHITECTURE

FACULTY OF ENGINEERING / DEPARTMENT OF ARCHITECTURE



絶対的な正解のない「問い合わせ」や「話題」に対し、課題を発見し、解決するための基礎能力を身につけることを目的として、建築学科1年生の後期科目「プロジェクトスキル」は開講されています。この科目では、雪の特性を活かした「雪造建築(Snow structure)」の製作を通して、さまざまな発見・考察・整理・表現するといった建築学を学ぶための基礎的素養を身につけることを目指しています。教員から雪に関する講義を受けた後、学生が主体的に作成方法や安全性を含め雪造形物を提案・プレゼンテーションを行いました。そのプレゼンを基に、いくつかのグループに分かれ、詳細な計画をたて雪造形物を製作しました。美しく、快適なものを安全に、限られた時間内で創造する大切さと楽しさを知り、建築分野への興味をさらに深める機会になったことでしょう。

まだ実現されていない 「国産カヌー用義手」の開発に挑んでいます!

REPORT / 保健医療学部
FACULTY OF HEALTH SCIENCES / DEPARTMENT OF PROSTHESES & ORTHOTICS

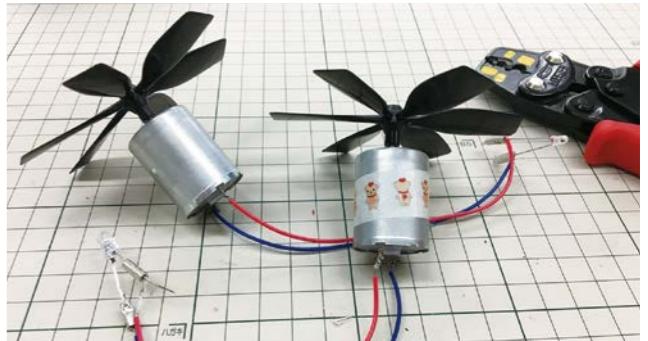


2016リオパラリンピックより、カヌーが種目として採用されたこともあり、障がい者スポーツの一つとしてカヌーの認知度が高まっています。腕を失った方がカヌーを楽しむには、カヌー用義手が必要となります。国内では開発されておらず、カヌーを行うことができません。義肢装具学科では、腕の無い方でも気軽にカヌーを楽しんでもらえることを目指し、カヌー専用の義手を開発しています。健常熟練者の方のデータと、開発した義手を用いた障がい者のデータを比較して、健常熟練者のデータに近づけるためには義手にどのような機能が必要なのかを考察しながら開発を行っています。



猿払村主催の生きがい学習 「みんなでふ~りよく発電器をつくろう」を実施!

REPORT / 工学部
FACULTY OF ENGINEERING / DEPARTMENT OF ELECTRICAL & ELECTRONIC ENGINEERING



2019年1月9日(水)、猿払村の地域交流施設「楽楽心(ららはーと)」において、小学生を対象とした、猿払村UCS生きがい学習「みんなでふ~りよく発電器をつくろう」が実施され、北方地域社会研究所(RINC)所長で電気電子工学科の木村尚仁教授が講師を務めました。これは、毎年同時期に猿払村の「楽楽心」と本学科デジタル第1実験室の「新・まねびシステム」とを遠隔会議システム(UCS)で繋ぎ、リアルタイムでやり取りしながら電気工作を行う企画の第3弾です。

当日は、最初に風力発電やLEDについて、クイズや簡単な実験からはじめ、風力発電作用モータや圧着ベンチなどを使い風力発電器を作製しました。難しい内容の工作でしたが、参加した小学生全員が完成させることができました。

看護学科の先生が、子育ての悩みをお聞きします。
ご参加ください「HUS子育て支援カフェ」。

REPORT
保健医療学部
看護学科

FACULTY OF HEALTH SCIENCES / DEPARTMENT OF NURSING

「HUS子育て支援カフェ」は、看護学科教員が中心となり、子育てを行う親や家族のストレス解消、生活の質の向上、児童虐待の防止を目標とし2014年に立ち上げました。子育てをされている方とそのお子さんを対象とし、子どもの事故防止についての講話・料理教室・ミニコンサートなどを実施してきました。9月に行われている大学祭では、子どもの遊び場の提供、手稻区栄養士による食事診断と食育相談、子育て中の両親に対し学生がアンケート調査を実施しました。多数の参加者がおり、毎年大盛況です。

直近の2018年12月10日(月)には、看護学科の実習室にて「あそびのひろば」を開催しました。お子さんを近くで遊ばせながら、看護学科の教員が育児相談にお答えさせていただきました。参加者同士の交流も活発に行われております。子育て中、特に冬場は子どもを遊ばせたり、親子で集う場所が減少し、自宅にて母子のみで過ごす時間が多くなります。「HUS子育て支援カフェ」の開催ニーズも高いため、今後も継続して実施していきたいと考えております。子育て中の皆さま、ぜひご参加ください。



開催案内は、
本学HPのNEWS&TOPICSに随時掲載いたします。
https://www.hus.ac.jp/hit_topics/



北海道開発局の皆さんと 都市環境学科の女子学生が 女子会を開催！

REPORT
工学部
都市環境学科

FACULTY OF ENGINEERING
DEPARTMENT OF CIVIL & ENVIRONMENTAL ENGINEERING

2018年11月22日(木)に、「北海道開発局女性職員と北海道科学大学女子学生とのランチとお茶の会」を開催しました。このイベントは都市環境学科の女子学生を対象に実施されたもので、今回は1~4年生の学生5名が参加し、北海道開発局の女性職員4名と都市環境学科の福原朗子講師と共に昼食をとりながら懇談を行いました。

1人ずつ自己紹介を行った後は、職員の皆さんから現在担当している仕事の内容や組織について、また女性ならではの悩みや仕事のやりがいなど多くのことが語られました。学生からも、今後の進路や興味のある分野について、また公務員試験の具体的な流れや就職後の様子について質問をするなど積極的に参加する様子が見受けられました。

参加した女子学生にとって、女性の働き方や将来の進路について考える貴重な機会となったようです。



REPORT HUS CAMPUS ILLUMINATION 2018

HUSキャンパスイルミネーション2018を、開催しました。



期間中、さまざまなイベントを開催しました！

12/7
(金)
クラブ学生
パフォーマンス

リコーダー部、サニーフィールズ・ジャズ・オーケストラ、YOSAKOIソーラン部～相羅～がパフォーマンスを披露。リコーダー部は、北海道大学リコーダー・アンサンブル部とも共演し、会場を盛り上げました。



12/14
(金)
PMF
ミニコンサート

PMF(パシフィック・ミュージック・フェスティバル)修了生を中心としたカルテット編成のミニコンサートが行われ、会場はクリスマスムード漂う美しい弦楽四重奏の音色で包まれました。



12/19
(水)
札幌国際情報高校吹奏楽部
Dance & Playing(ダンプレ)

年間約80公演をこなし、全国区の知名度を誇る札幌国際情報高校吹奏楽部によるダンプレライブを実施。サンタクロースやトナカイに扮したメンバーが一糸乱れぬダンスと演奏を披露し、観客で超満員の会場を沸かせました。



2018年11月30日(金)～12月25日(火)、本学メインプロムナードにおいて、HUSキャンパスイルミネーション2018を開催しました。このイベントは、本学開学50周年を記念して初開催した2017年に引き続き実施したもので、ステンドグラスアーティストのMie氏がデザインした高さ6mのツリーと2.4mのオブジェ14基、小学生と保護者による手作りキャンドルホルダー約150個が冬のキャンパスを彩りました。

イベント初日の点灯式では、点灯セレモニーのほか、北海道科学大学高等学校合唱部によるクリスマスソングや、本学YOSAKOIソーラン部による演舞が披露され、大いに盛り上りました。またメインプロムナードでは、建築学科の千葉隆弘教授及び建築学科4年生が製作した約100個のアイスキャンドルにも光が灯され、暖かな光の道を作りました。



LUNCH
and
LEARN

